様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３０１１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０３０５０

研究課題名（和文）コモロ人移民同郷組合による開発援助と地域社会の変容に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Association of Diaspora and Social change in the Comoros

研究代表者
花渕　馨也（Hanabuchi, Keiya）

北海道医療大学・看護福祉学部・教授

研究者番号：５０３２３９１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　現地調査に基づく研究により、マルセイユに在住する、コモロ諸島・グランドコモロ島出身の移民と故郷の家族や地域社会が、移民個人による海外送金や同郷組合を中心とした援助活動により強い紐帯を維持する具体的実践について詳細に明らかにすることが出来た。また、それにより、トランスナショナルな社会空間において、伝統的な年齢階梯制に基づく社会構造や社会規範を変容させ、フランス社会の影響を受けた、新たな経済と名誉の基準に基づく社会関係を形成しつつあることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
グローバル化が進行し、多くの人口が柔軟に移動する次代にあり、コモロ諸島のような小島嶼国家のみならず、多くの発展途上国は大量の移民を先進国に送り出しており、移民と故郷を結ぶトランスナショナルな社会空間が、従来の社会的関係を再編し、変容させつつあるといえる。移民による故郷への海外送金や組織的な援助活動は、発展途上国の経済や文化、社会生活に大きな影響を与えるようになっており、コモロ人移民による故郷との社会的紐帯をミクロな人類学的視点から明らかにしたことは、トランスナショナルな社会空間の中で、人が取り結ぶ新たな社会関係の具体的な動態について知る上での、基礎的な研究となると考える。

研究成果の概要（英文）：Through the fieldwork in the Comoros and France my research has revealed how “Diaspora comorienne” from the Grande Comore of the Comoros Islands have kept strong social ties with their family and home village by the remittances and aid efforts of associations organized by migrants. In the transnational space, activities of diaspora comorienne has begun to transform the social structure of their home village. The village society and cultural norms based by traditional age-system “Anda” has changed to new transnational social order influenced by economic status and social privileges of migrants in France.

研究分野：文化人類学

キーワード：移民　トランスナショナル　ディアスポラ　海外送金　援助　アソシアシオン

１．研究開始当初の背景

交通や通信の発達により加速化するグローバル化の新たな局面では、人の移動が著しく増大し多様化するとともに、移民と故郷との関係がより緊密となり、移民による活動が地域社会に及ぼす影響はますます大きなものとなっている。世界銀行によれば、先進国から発展途上国への海外送金の額は、1995 年の 550 億ドルから 2010 年には 3250 億ドルを超えて急激に増加してきた。非公式のルートによる送金や物資の輸送分を含めるとその規模はさらに大きくなる。こうした動向に対し、2000 年代になると国際機関や民間団体が移民の重要性を認め、世界銀行の報告書[Economic implications of remittances and migration 2005]等に基づき、移民による開発援助を推進する取り組みが行われるようになってきた。国連開発計画による『人間開発報告書 2009』では、「人の移動を通して人間開発を促進できる可能性」について特集を組み、国際社会が人の移住に対処するための新たな世界規模の体制を作り、移住を開発戦略の中心とするために具体的な提言を行っている。こうした国際的動向を受け、フランスにおけるアフリカ系移民による故郷への援助活動の組織化が顕著に見られるようになった。

東アフリカのコモロ諸島にある極小国家コモロ連合国では、80 年代以降フランスを中心に移民が急激に増加し、今では 80 万人の国民のうち 30 万人以上が海外で暮らすようになり、移民により故郷に送金される総額が国家予算の 2 倍にのぼると推計されるほどその影響力は大きなものになっている。また、移民による開発援助を推進する国際的動きと連動し、コモロ連合国では、国の発展のためには「ディアスポラ・コモリエンヌ」と呼ばれる海外移民との関係が重要であるという認識を示し、海外送金の優遇措置など、近年では移民による経済活動を重視した政策を実施するようになってきている。

研究代表者は、2006 年以降マルセイユのコモロ系移民社会において調査を開始し、2009～2012 年度には移民と故郷とのトランスナショナルな紐帯に関する調査を行い、主に単身移民女性のライフヒストリー研究を行った（業績参照）。フランスに住むコモロ人移民は都市部に集住し、強い紐帯をもつ移民コミュニティを形成する一方で、故郷の家族との関係を維持し、出身村を単位とした「同郷組合」（Association）の援助活動を通じて故郷との交流を活発に行っている。申請者は調査において、フランスで生活保護を受けて貧しい生活を送りながら、故郷や家族への援助活動になけなしのお金を提供し、そうした援助活動こそが人生の目標であり、喜びだと語る多くの人々と接してきた経験を通じ、「援助」という道徳的イデオロギーの浸透と贈与交換に基づく社会関係の形成について捉えることが、グローバル化による地域社会の新たな変化を理解する上で重要である事に気づき、本研究計画を着想するに至った。

コモロ人移民による故郷への援助活動の高まりは、三つの条件によるものと考えらえる。一つは、21 世紀となり、発展途上国への援助の形態が、先進国の国家や国際機関、NGO によるトップダウン的な直接的援助から、発展途上国からの移民による故郷への援助活動のバックアップという、より有効な間接的援助の形へと大きく変化してきたことである。二つ目には、世界的な市民社会運動の高まりとフランス国内におけるアソシアシオン活動の活発化を受け、90 年代以降、移民のアソシアシオン活動が盛んとなったことである。コモロ系移民のアソシアシオンもほとんどが 90 年代以降に設立されたものである。

三つ目には、70 年代以降に遅れてやってきた移民であるコモロ系移民が十分に増加し、同じ村の出身者がネットワークを形成し、経済的に安定し、組織的活動を行える条件が整ったということである。こうした複合的な条件を背景とし、村を基盤とするコモロの社会構造に基づいて移民の同郷組合が組織されるとともに、村の伝統文化に基づいた行事をリニューアルする形で援助活動を行う新たな援助文化が創造されてきた。

「援助」という理念がトランスナショナルな空間で規範化され、その活動が組織化されることで、移民と故郷の関係は新たな贈与・交換関係に基づく社会的紐帯を形成するようになってきており、また、コモロの社会構造を強く規定してきた年齢階梯制による伝統的社会構造にも変容が起き始めている。本研究は、移民同郷組合の開発援助によるコモロの地域社会の変化について、上記の三つのレベルに焦点を当てることで以下の点を明らかにする。①移民による開発援助を推進する国際的動向についての政治・経済的なマクロな視点からの解明、②移民の同郷組合の組織化と「援助文化」という規範の生成についての解明、③援助を通じた移民と故郷とのトランスナショナルな共同体の形成とそれに伴う伝統的な社会構造や伝統文化の変容について民族誌的解明。最終的には、これらの分析を統合し、多様なレベルの主体間の相互作用としてグローバルな規範としての「援助」活動による地域社会の変化を捉える新たな民族誌的研究の方法を構築することを目指す。

２．研究の目的

本研究計画は、フランスのコモロ人移民同郷組合による故郷村への援助活動を通じて再編成されつつある地域社会の変容と新たなトランスナショナルな社会的紐帯の創出について明らかにすることを目的とする。越境的な繋がりが一層緊密化するグローバル化の局面において、フランスに住む多くのコモロ人移民と故郷村との関係はより持続的で多様なものとなり、トランスナショナルな空間の中で新たな社会的紐帯が形成されてきているが、その関係の重要なモチーフとなっているのが移民による故郷村への「援助」である。本研究では、南仏マルセイユ市を中心としたコモロ人移民コミュニティ、およびコモロ諸島・ンガジジャ島における移民の故郷村での現地調査に基づき、「援助」という贈与関係を通じて形成され、再編成されつつある移

民と故郷とのトランスナショナルな共同体のあり方と、その社会空間における新たな援助文化の生成について人類学的方法によって明らかにする。

３．研究の方法

本研究の方法は、文献検討およびフィールドワークである。「移民による故郷への開発援助」を推進する国際的な動向やフランスやコモロの国家政策を検討するための公共機関による報告書や統計資料などの文書資料を収集・分析するとともに、フランスのマルセイユを中心としたコモロ系移民コミュニティと、彼らの故郷であるコモロ諸島の村落での長期のフィールドワークを実施することで、援助を通じた移民と故郷との新たな社会的紐帯の再編成について具体的にその実態を明らかにする。調査手法としては、現地での聞き取りと参与観察を基本とし、会話や映像の記録を調査資料とし、特に、特定の村におけるアソシアシオンと、そこに参加するいくつかの家族を集中的に調査し、その同郷組合および家族史の変遷や、世帯の生活、家族関係、同郷組合への参加状況などについて詳細な調査を行う。

４．研究成果

本研究は、概ね計画に沿って順調に進めることが出来た。フランス・マルセイユ市におけるコモロ人移民の調査では、移民の生活実態とＨ地区・Ｓ村の同郷組合についてフィールドワークを行い、十分な調査資料を収集することができ、移民のアソシアシオン活動の実態を明らかにすることができた。また、コモロ諸島・ンガジジャ島での調査ではＨ地区の広域調査、およびＳ村での集中調査を実施し、移民や同郷組合による海外送金や援助活動が故郷村に及ぼしている影響について明らかにすることが出来た。以下では、本研究により明らかになった点を５つにまとめる

第１に、コモロ人移民がアソシアシオンを組織し、多様な活動を展開するようになった歴史的経緯と、現在における同郷組合の組織について明らかにした。コモロ諸島は 19 世紀半ばからフランスによって植民地化され、1975 年に独立を果たすが、その後もフランスとの経済的関係を強く持ってきた。1980 年代から急激に増加するようになったコモロ人移民は、マルセイユ、パリ、リヨン、ダンケルクなどの都市部に移民コミュニティを形成するようになり、1990 年代半ばからは、積極的にアソシアシオンを組織するようになった。現在では、フランス全土で 300 以上ものコモロ人移民によるアソシアシオンがあると推計されている。アソシアシオンの組織化が進んだ背景としては、フランスにおける市民によるアソシアシオン活動の高まりにあわせ、外国人移民の相互扶助と社会統合を目的としたアソシアシオンの形成が増加したことがある。アソシアシオンに対する公的補助金を受給するためには、行政府が要請するアソシアシオンの登録や、組織活動や経理の報告書の提出が必要であり、そうしたフランスの行政的な「組織モデル」を雛形として、同郷者による伝統的共同体の紐帯を基盤としたコモロ人移民集団は、市民による有志の任意団体という新たな装いをまとった組織として形成された。

第２に、アソシアシオンとしての同郷組合による故郷村への援助活動の実態を明らかにした。同郷組合の目的は、移民同士の相互扶助や文化交流などさまざまなであるが、最も中心的な活動目的は故郷村への援助活動である。各村の同郷組合は、定期的にメンバーから募金を集めたり、“Madjilissi”というイスラームの祈祷会や、“Wadaha”という女性の伝統的ダンス、“Twarab”というダンスパーティーなどのイベントを開催し、入場チケットを販売したりするなどして資金を集め、故郷の村の道路や水道、電気の整備、病院、学校、モスク、公共広場などの建設、楽器や図書などの寄贈など、さまざまな援助を行っている。1975 年の独立以来、コモロ国家の財政は困窮状態が続いており、インフラなどの整備は遅れてきたが、国家に代わり、移民の同郷組合が地域の公共事業のほとんどを担っている状況である。同郷組合は、コモロの伝統社会における“msaada”という相互扶助の規範に基づき、トランスナショナルな社会空間の中で、新たな「援助」という規範を生み出し、「援助文化」を創造していることが明らかになった。また、また、援助という規範の中で、同郷組合にどのように参加するかによって移民同士の社会関係が築かれるとともに、同郷移民のあいだ、および各村の同郷組合間で援助によって獲得される名誉をめぐる競争が見られることが明らかになった。

第３に、個々の移民がどのように移民コミュニティにかかわり、同郷組合に参加し、故郷とのつながりをもっているのかを明らかにするため、個別のケーススタディを行った。特に、ある移民女性の家族のライフヒストリーから、移民による同郷組合への参加や、移民による「海外送金」を通じて、いかに移民と故郷村、移民と故郷の家族の紐帯が維持され続けるのかを明らかにした。コモロ人移民の多くが、移動の動機、移動の経路、フランスにおける生活状況、移民コミュニティや同郷組合とのかかわりなどにおいて共通した特徴をもっているが、個々の移民のケースでは、移民として生き残り、成功するための多様な実践がみられる。また、フランスの社会制度と、コモロ社会のイスラームや伝統的慣習に基づく制度や規範のあいだにあり、移民は、出生届や婚姻届などの制度を巧みに利用し、入国や滞在許可証、国籍の取得、失業手当や生活扶助の取得などにおいて、時には、非合法的な「ムカラカラ」（mkarakara）とよばれる裏取引きも実践している。同郷組合は、そうした生活戦略の情報をやり取りし、相互に扶助し合う中心的な場となっており、ほぼすべてのコモロ人移民は同郷組合に参加し、そこでの社会的関係を中心に生活している。しかし、フランス生まれの移民 2 世や３世が増加するなかで、同郷組合への関わりかたには、個人の事情によって濃淡が出て来ており、故郷社会への援助活

動への寄与度を巡り、世代間の軋轢も生じてきていることが明らかになった。
　第４に、同郷組合による故郷村への援助活動、および移民個人による故郷の家族への海外送金などのトランスナショナルな贈与関係により、コモロの社会構造や文化的慣習がどのように変化してきているのかを明らかにした。地域社会の開発に多大な影響をもち、経済的に優位に立つだけでなく、その経済力によって“anda”（アンダ）と呼ばれる年齢階梯制を上昇することで社会的威信を獲得できる移民は、選挙への関与などを通じてコモロ国家の政治に対しても大きな影響力をもつようになっており､故郷の地域社会に大きな変化をもたらしつつある｡特に、村社会の政治において最も重要であり、個人と母系氏族の名誉の価値にかかわるアンダの制度は、移民の影響により大きく変化してきている。アンダの年齢階梯制では、男性は「村の子供」（mwana mdzi）と呼ばれる階層から、「父なる者」（mundru wa baba)、または「一人前」（mndru mdzima）と呼ばれる大人の階層へと上昇するために、「大結婚式」（ndola nkuu）という伝統的慣習に基づく結婚式を開催する必要がある。移民の増加にともない、1980 年代以降、大結婚式にかかる費用は増大し、贅沢さをめぐるポトラッチ的な競争がみられるようになった。それにより、多くの移民が大結婚式を開催し、アンダの階梯を上昇する一方で、村に残っている男性の多くが、資金を調達できず、階梯を上昇できないまま取り残されるという現象が出て来ており、それにより、アンダがもつ政治的機能が働かない状況もみられるようになっている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

①花渕馨也　「ディアスポラ・コモリエンヌによる海外送金と家族戦略」、北海道医療大学『人間基礎科学論集』、2018.11、44 巻：1-21

〔学会発表〕（計　3　件）

①花渕馨也　2018.9.1 「ディアスポラ・コモリエンヌによる海外送金と家族戦略」、2018 年次日本島嶼学会東京大会（法政大学・市ヶ谷キャンパス）

②花渕馨也　2017.9.2 「ンガジジャ島の白いスルタン　－　Léon Humblot による非正規な植民地支配　－」、2017 年次日本島嶼学会甑島大会（鹿児島県・甑島・薩摩川内市里公民館）

③花渕馨也　2016.9.3　「2016 年コモロ大統領選挙におけるディアスポラの関与について」、2016 年次日本島嶼学会大崎上島大会（広島県・大崎上島町・広島商船高等専門学校）

〔図書〕（計　2　件）

①花渕馨也　「儀礼的屠殺とクセノフォビア　－　残酷と排除の文化政治学　－　」、シンジルト＆奥野克巳編『動物殺しの民族誌』、昭和堂、2016.10、p15－56

②花渕馨也　「第 6 章　老いてなお子ども　－　コモロ諸島ンガジジャ島における年齢と階梯」『アフリカの老人：老いの制度と力をめぐる民族誌』　田川玄・慶田勝彦・花渕馨也共編、九州大学出版会、2016.3、総頁数 p246（159-186）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。